

織守
ORIGAMI
KYOYA
きよよし
お

Illustration: しづま

霊
感

れいかんけんてい

検
定

プロローグ first contact — 5

第一章 — 15

第二章 — 79

空 2years ago — 109

第三章 — 121



ふじ ちと しゅう じ
藤本修司
大阪から東京に
やってきた転校生。
九条高校二年。
眼鏡。



びつ はる おか
伐晴臣
空の幼なじみ。
九条高校二年。
過保護。



は とり さら
羽鳥空
不思議な空気を
まとった少女。
九条高校二年。
小柄。

第四章

147

夏目 messenger

213

第五章

221

第六章

247

彼女の話
about her

293



馬渡先生

九条高校司書。
自称心靈研究家。
「靈感検定」を開発。

筒井 遥

欠かせない男。
新宿東第一高校二年。
いい奴。

清水 笛子

図書委員。
九条高校三年。
クールビューティー。

夏目 歩

陽気なムードメーカー。
新宿東第一高校二年。
あなどれない。

装幀・柳川 佃津夫 十 大野 裕介 (S P I C E)

プロローグ

first
contact

藤本修司がアルバイト先のラブホテルから出ると、雨が降っていた。

マジか、と思わず咳く。

修司は普段、自宅からアルバイト先まで、歩いて通勤している。しかしこの雨では、徒歩二十分の距離は辛い。

控え室に置き傘があるが、傘を差しても、自宅に帰りつく頃にはデニムの裾が水を吸って冷え切ってしまうだろう。夜のシフトが続いたせいか、ただでさえ体がだるいのだ。疲れた体に冷たい雨はこたえる。

明日から新学期、しかも転校初日だというのに、風邪引きの状態で登校というのはできれば避けたい。つた。

(……しゃあない、バス使うか)

一人暮らしの高校生にとって割増料金は痛い、深夜バスの最終に、急げば間に合うかもしれない。時刻表通りにバスが来ていたら走ってもギリギリア

ウトだが、雨の日にはバスは遅れるものだ。

修司は控え室からとってきたビニール傘を開き、早足で歩き出した。

風俗店や飲み屋のある短い通りを抜け、バスの停留所へと急ぐ。

深夜だというのに、人通りは少なくなかった。

傘が他人に当たらないよう気を付けながら歩き、停留所のほうを見ると、長い列ができていた。やはりバスが遅れているらしく、一台に全員乗り切れるか、微妙なくらいの人数が並んでいる。

舌打ちしたくなつたが、次に来る最終バスに乗るしかない。小走りに駆け寄って、最後尾に並んだ。

大分窮屈な思いをすることになりそうだが、とにかく間に合った。

ほっと息をついて首を左右に倒すと、ばきばきと骨が鳴る。

体に疲れが溜まっているのだろう、首から背中あたりまでがどんよりと重く、肩こりもひどかった。

学校が始まったら、深夜のバイトは控えたほうがいいかもしれない。

それ以前に、確か校則でバイトそのものが禁止だったような気がするが、親元を離れて生活をしている身だ。実入りのいい仕事をそうそう手放すわけにはいかなかった。この東京砂漠で、高校生が一人生きていくためには犠牲も必要なのだ。

(あかん、頭痛までしてきた……)

眼鏡の下から指を入れ、目頭を押さえた。こめかみのあたりも痛む。

早く帰りたい、バスはまだか——と思ったとき、ばしゃばしゃと水をはねさせながら近づいてくる足音が聞こえた。

最終バスの乗客がまた一人増えたらしい、そう思っ
って顔もあげずにいたが、

「だめ」

すぐ近くで声がして、傘を持っていないほうの手を、誰かにつかまれる。

驚いて目を向けると、髪の長い、小柄な少女が、修司の腕を両手でつかんで立っていた。

「……え？」

誰だ。

「こつち」

少女の手が、腕を引く。

華奢な体と腕の間に挟まれていた傘がかしいで、柔らかな髪に雨粒が当たった。それでも気にする風もなく、彼女は修司の腕から手を放そうとしな
い。

「来て。こつち」

困惑した。

初対面の相手に理由も説明せず、こんな行動はあ
きらかにおかしい。かといって、ふざけているよう
にも見えなかった。

どこかで会っただろうか、思い出せない。

しかし、相当可愛かった。

「えっと、……あんな、俺、バス待ってって」

「だめ。早く」

見上げてくる大きな目からは、感情が読み取れない。
譲らない声と目に負けて、引つ張られるように、

バス待ちの列から抜け出した。

少女はぐいぐいと修司を引つ張って、数メートル離れた銀行の前まで連れていく。

角を曲がれば、タクシー乗り場だ。

どんどんバス停から離れ、さすがに慌てる。時刻表通りであれば、バスはとっくに来ている時間だ。

すでに十分近く遅れているのだから、もういつ来てもおかしくない。

「なあ、自分、何なん。理由くらい……あ」

バス停を振り返ると、ちょうど、最終バスが着いたところだった。

並んでいた人たちが、次々と乗車口に吸い込まれていく。

「バスや。俺あれに乗らんと……」

ぐくと、少女の手に力がこもった。少女の水色の傘が水たまりに落ちる。

真剣に見上げてくる大きな目に気圧され、修司は思わず口を閉じた。

「あのバスには、乗っちゃダメなの」

乗車口のドアが閉まる音がする。

本日最後の乗客たちを詰め込んで、バスは発車した。

華奢な彼女の手を振りほどくことは簡単だろうが、何故かできなかった。

呆然と、乗り込むはずだったバスを見送る。

バスがすっかり見えなくなるとやっと、腕から彼女の手が離れた。

(あーあ……)

今さら放してくれても遅い。

見知らぬ少女と取り残され、修司は肩を落として息を吐いた。

何のつもりだと怒鳴るくらいしてもよさそうな状

況だったが、相手は女の子。そして修司は、十六年間、目立たず、波風を立てずに生活することをモットーとして生きてきた人間だった。

彼女に怒っても仕方がない。それでバスが戻ってくるわけでもない。

もともとあきらめは早いほうだった。

修司はもう一度ため息をつく、腰を屈め、持ち手を上へ向けて転がっている水色の傘を拾い上げる。

「……濡れるで」

修司の出方をつかがうように黙っている少女へ、差しかけた。

少女は傘を受け取り、

「ありがとう」

小さい声で言った。

謝罪の言葉はない。しかし、悪気がないらしいことはわかった。

「……怒つたらんよ。怒つたらんけど」

東京人に、関西弁は強く聞こえることがあるとい

うことはわかっている。あまり目つきのいいほうではないと自覚もあるから、怖がらせないよう声の調子に気をつけ、言葉を選んだ。

責めるつもりもないのが伝わったのか、少女は両手で傘の柄を握り、じっと修司の言葉を待つように黙っている。

何故こんなことをしたのかを訊こうと口を開きかけたとき、どこかで素っ気ない着信音が鳴った。

あ、と少女が着衣のポケットを探り、携帯電話を取り出して耳にあてる。

なんとかくん、と電話の相手の名前を呼んだようだが、聞き取れなかった。

「大丈夫。もう終わったから。……うん。うん」

あまり抑揚のない、静かな声。

知人に対してもこんなしゃべり方なのか。おとなしそうな子だ。そう思うと、ますますさっきの行動の意味がわからなくなる。

「大丈夫。……うん。タクシーに乗る。今乗り場に

いるから。すぐ、乗るから」

少女は話しながら数歩進んで、タクシー乗り場に立った。

修司も、思わず追うように二、三步前へ出る。

まだ、意味不明な行動の理由を聞いていない。

しかし修司が声をかけるより早く、少女は携帯電話を切ると、待ち構えていたかのように近づいてきたタクシーに乗り込んだ。

ドアを閉める前に修司に顔を向け、

「気をつけて、帰って」

そんな一言だけを残す。

ぱたんと目の前で扉が閉まり、タクシーは走り去った。

「……はあ」

何だそれ。

もう完全に声の届かない距離まで離れていたが、思わず叫んだ。

理不尽すぎる。

もはや怒るといふより、脱力する。

何の説明もなく去られてしまったことに加え、わずかな躊躇もなくタクシーを使えるようなセレブぶりにも。

立ち尽くしていると、次のタクシーが滑り込んできて、目の前で止まった。

手をあげた覚えはないぞと一瞬怪訝に思ったが、気が付いてみれば、修司が今立っているのはタクシー乗り場だ。当然のようにドアが開き、乗車を促した。

「どうぞ。どちらまで？」

違うんです乗るんじゃないんです、と言おうとしたまさにそのタイミングで、運転手が振り向いて声をかけてくる。

「……えと、あの」

目が合ってしまった。

全開になったドアから、後部座席に雨が降り込んでいる。

観念するしかなかった。

「……北町四丁目までお願いします……」

言いながら乗り込んだ。

座席の左側は、降り込んだ雨で湿っている。修司が右側に寄ると、すぐにドアが音をたてて閉まった。

「四丁目、どの辺まで行けばいいですかね？ バス停のあたり？」

車を走らせながら、運転手が気安い調子で訊いてくる。

シートにもたれ、息を吐きながら、こっそりメーターを確認した。深夜割増料金二割、と表示がある。ここから自宅までなら、千円くらいだろう。

「街道沿いに走ってもらって、右手に消防署があると思うんですけど。その手前をお願いします」

「はいはい。なんだお客さんすっかりしてるね。酔っぱらってるのかと思っただけど。それとも、彼女さんに怒られて酔いが覚めたかな」

高校生が酔っぱらっていたら問題だ。

はあ、と適当に返すと、

「あそこのバス停のところに立ってたでしょ。もうバス終わってるのにさ」

話し好きなのだろう、運転手はハンドルを切りながら朗らかに笑った。

「雨でバスが遅れとつたみたいで……」

「遅れてないよ、時間通りに来たよ。あそこで客待ちしてたから見ただけだね」

赤信号で止まった。

何と答えればいいのかわからなくて、修司は黙る。

言われた言葉の意味がわからない。

あのととき修司の他にもバス待ちの客は列を作っていたし、実際に、バスは遅れてきた。この目で見ているのだ。

「そしたらお客さんが、何か変な歩き方しながら来て、後ろのほう、端っこのほうに突っ立ってるからさ。あーこりゃ酔っぱらってるんだなって。他に誰も並んでないバス停に、わざわざ回り込むみたいに

してさ」

「……はい？」

変な歩き方など、した覚えはない。人が多くて歩きにくかったが、普通に歩いて、普通に列の最後尾に並んだだけだ。

修司が肩を寄せても、運転手は気づいた様子もなく続ける。

「でも、彼女さんが連れに来てくれてよかったね。

あのまま一晩中あそこに立ってたら、風邪引いちゃつてたよお客さん。彼女さん、怒って先帰っちゃったみたいだけ」

「………」
よく、わからない。

何だか不穏なことを言われた気がするが、それがどういう意味なのか、うまく頭で処理できなかった。この運転手こそ酔っているのか、それとも、雨で見間違いでもしたのか。いずれにしろ、突き詰めてもいいことはなさそうだ。

修司は黙って窓の外を見た。人気は全くと言っていいほどない。

深夜料金千二百円を払って、タクシーを降りる。出費は痛かったが、新学期しよっぱなから風邪を引かずに済んだのだからいいとしよう。

この夜のことは、忘れることにした。